

Title	形而上学成立の宗教的根拠について：自然神学と啓示神学のかかわりの構造
Sub Title	
Author	間瀬, 啓允(Mase, Hiromasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1977
Jtitle	哲學 No.66 (1977. 9) ,p.186- 187
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田哲学会例会発表要旨
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000066-0186">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000066-0186</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 形而上学成立の宗教的根拠について

### —自然神学と啓示神学のかかわりの構造—

間 瀬 啓 允

一般に自然神学と啓示神学の区別は明瞭であり、この明瞭な区別が Catholicism と Protestantism の神学的立場の差異を構成すると考えられている。また啓示神学は信仰の立場から論証的真理のすべてをアプリオリに演繹できるとする意味で Fideism であり、これに対して自然神学は理性による論証力のみによって啓示的真理さえも論証的真理のほうから導き出せるとする意味で Rationalism であるといわれ、ここには Fideism と Rationalism の、いわゆる“ism”の対立がみられるといわれている。けれども自然神学 vs. 啓示神学、Catholicism vs. Protestantism、Fideism vs. Rationalism というふうに事態の対立を考察することが何か重要な哲学問題であるかのように考えるならば、それは“——vs.——”という二分法の枠組を先取したうえでの、二者択一的な意志の決断を迫るといった問題設定にもとづいている。このような二分法による判断は事態の単純化のためには役立つように見えても、けっして事態の正確な叙述のためには役立つものではない。そこで今回の研究発表では、二分法による判断にもとづいた両者の差異の探究ではなく、事態のより正確な叙述のために、両者のかかわりの構造を探究してみた。またそうすることによって、形而上学の成立のための宗教的根拠をも合わせて明確化させようと試みた。

1. 形而上学は最後の部門である自然神学において「神の存在を論証し、自然的理性の要請にもとづいて神を認証する」といわれる。またこの最後の部門である自然神学は「神の存在を自明として前提しないで、ただ自然的理性の論証力のみによって」といわれる。しかし自然神学が神の存在を前提しないで、ただこれを自然的理性の論証のみに委ねるとするならば、その論証の結論が無神的でなく有神的存在であるという保証はどこにあるのか。無神論的な結論に至るかもしれない論証に対して、はじめからこれを「神学」とよぶことができるのか。たとえば「創造主である唯一の神は被造物から、理性の自然的な光によって知られうる」といわれる場合の、この「知られうる」とする判断の前提にあるものを考えてみよう。伝統的にトマスによって考えられた神の存在証明では「因果の系列にはかならず終りがなくてはならない——たとえ系列自身が有限であっても無限であっても」と見る (seeing as) とか、「偶存有があれば必存有がかならずある」と理解する (understanding as) とかの、

信念に特有な認識論的構造のものがうかがわれる。したがってここには究極的な一者の存在に対するコミットメントがはたらいていることは明らかである。

2. 自然神学が自然的理性の自己主張を行っているのではなく、その成立の根拠に究極的な一者の存在に対するコミットメントがはたらいているのだとしても、その一者が「神の名」をもってよばれる神であるという保証はどこにあるのか。自然的理性によって論証された第一原因なり、必存有なりが、不生不滅、不変不動、つまり永遠であるという属性をもつことが明らかにされたとしても、その属性の示す抽象的な性格が適切に神そのものを指示しているとどこで言えるのか。トマスによれば、啓示的真理と論証的真理とが交錯する部分においてそれが言えるという。この交錯部分において、自然的理性によって知られた一者が、同時に啓示された神でありうるとされるのである。ここにおいて自然神学 vs. 啓示神学は調停されて、両者のかかわりの構造が浮かび上がる。即ち「神在り」という自然神学的真理がそれ自体すでに啓示的真理の中に入れておられ、また「神は創造する」という啓示的真理が「神在り」という自然神学的真理を不可欠の条件としているので、「自然神学成立の可能性は創造主としての神という最も啓示神学的な事実に基づけられることになるし、また逆に神の存在を論証し、認証するといわれる自然神学の可能性は啓示神学自体によっても求められることになるのである。

3. トマスが啓示的真理のうち論証的真理の一部を啓示可能の真理として包含せしめたことは、それ自体かれの「啓示神学的営みであった」といわれる。そうすると「第一哲学（形而上学）の全体は最終的に神の知識に向けられる」と言明したトマス自身のうちに、自然的理性の論証以前に、それによって論証されるべき神の存在に対する信仰が先行していたことになる。これは矛盾ではないのか。ここには一体どのような信仰の論理が働いているのか。超越論的形而上学者としての自然神学者に共通な思考方法は「論点先取」である。かれは「神の名」をはじめから知っている。かれは論証の行き着く先をはじめから知っているのである。これは信仰の論理に共通した構造でもある。なぜならそこに働らく論理は結論を反証してこれを否認することではなく、先取した結論を論証してこれを認証することだからである。有限者に対する究極的な実在の根拠を多者としてではなく一者として認めるということは、この一者に対するコミットメントが先行しているからであり、さらにこの一者が啓示された「神の名」に内含されているとする認定は、まさしくこの場合の信念の確認であり認証なのである。それゆえ自然理性の要請による神の認証とは performative なものであって、logical なものではない。実践的なものではあっても、けっして理論的なものとはいわれえない。この点でトミストの多くは大きな思い違いをしているのではなからうか。